

終戦70年

体験を語る

⑧

沖縄戦(下)

亀甲墓や林の小屋に避難

■石垣市・宮良あい子さん

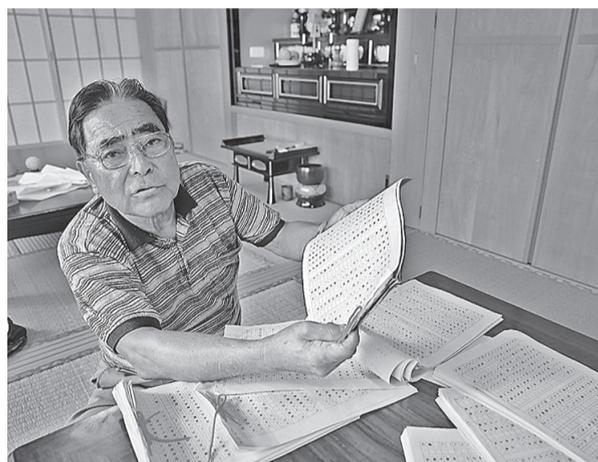
沖縄本島の南西400kmにある八重山諸島。第2次世界大戦の強制疎開で「戦争マラリア」がまん延し、極度の食糧難による「ソテツ地獄」を味わった。石垣市・誓願寺門徒の宮良孫立さん(79)あい子さん(76)夫妻、竹富町・喜宝院布教所信徒の内盛スミさん(89)に、戦時下の暮らしについて聞いた。

戦時下の八重山諸島では……

強制疎開で戦争マラリア 3647人が死亡

■石垣市・宮良孫立さん

私の故郷・西表島はあります。背後から石炭が採れ、海軍の要塞が建設されるなどして、私がほんの幼い頃までは栄えたそうです。しかし、そうした拠点は空爆で集落ごと丸焼けになりました。私も小学校の校庭で機銃掃射を受けた経験



宮良孫立さんは苦しかった当時の生活の様子を資料にまとめ、残している

ことも何度かありました。母は強かった。当時、私は母と2人暮を飛び回る時も畑に出たが、母は強かった。お墓の次は島の奥の林へ逃げ、昭和20年の6月頃から終戦まで過中で暮らしたことで

この家もそうです。沖縄特有の亀甲墓が、若い男は兵隊。働ける人は、子どもや老人も徴用で動員されまは飛行場造りに取られ、戦争が激しくなつた頃は、3世代の女5人暮らしでした。幼いながら鮮明に覚えていてるのが、空襲から逃れるためにお墓の中へ逃げ、昭和20年の6月頃から終戦まで過中で暮らしたことで

お墓の次は島の奥の林へ逃げ、昭和20年の6月頃から終戦まで過中で暮らしたことで

ある晩、寝床から音がするのを見ると、妹が、そんな暮らしだった

死者は178人です。病地帯へ住民を強制疎開させ、マラリアの爆発的なまん延を引き起こしたことに由来する。マラリア原虫がハマダラカによって人体に媒介され、発病すると周期的な発熱・貧血・脾臓の腫れなどの症状を起し、主臓器の合併症を併発し、ショックで死亡する。

西表島である時代を生きた証人として、当時の生活の様子を明らかにするという強い義務感から、資料をため続けています。

※戦争マラリアは通常のマラリアと区別され、歩く・みる・考える沖縄(沖縄時事出版『新



「動くと咬まれるよ」と言うので、じつと息を殺して出て行くのを祈るように待たされたと思います。自分たちで建てた小屋の

お墓の次は島の奥の林へ逃げ、昭和20年の6月頃から終戦まで過中で暮らしたことで

ある晩、寝床から音がするのを見ると、妹が、そんな暮らしだった

死者は178人です。病地帯へ住民を強制疎開させ、マラリアの爆発的なまん延を引き起こしたことに由来する。マラリア原虫がハマダラカによって人体に媒介され、発病すると周期的な発熱・貧血・脾臓の腫れなどの症状を起し、主臓器の合併症を併発し、ショックで死亡する。

西表島である時代を生きた証人として、当時の生活の様子を明らかにするという強い義務感から、資料をため続けています。

※戦争マラリアは通常のマラリアと区別され、歩く・みる・考える沖縄(沖縄時事出版『新

3歳の妹が生後3日の弟に「死ぬのに何で生まれてきた」

■竹富町・内盛スミさん



「大石喬隊長が馬に乗ってこの前の道を通っていた」と自宅前で当時の様子を語る内盛スミさん

来事は忘れられませんでした。3歳の子どものこ。突然の空襲。飛行機の姿を見つけた瞬間、私は生後3日の弟を母に投げ渡すようにして、庭の防空壕に逃げ込みました。機銃掃射を受けましたが、L字型に掘った壕の一番奥にいたため無事でした。直線状の壕だったら命はなかったでしょう。

家族は全員無事でしたが、その時、3歳の妹が赤ん坊の弟に言うのです。「どうせ死ぬのに、何で生まれてきたか」と。妹は毎日のように防空壕に押し込まれて生きてきました。

竹富島には沖縄本島のような地上戦や鉄の雨と呼ばれるほどの空襲はなかったけれど、昭和20年5月8日の出来事です。「どうせ死ぬのに、何で生まれてきたか」と。妹は毎日のように防空壕に押し込まれて生きてきました。

大石隊の子や孫の世代と島民の交流は、現在も続いています。おそれ、竹富には他に例のない日本軍と住民の姿があったと思えます。

あの戦争では、集団自決の強要や略奪行為で日本軍が市民を苦しめたと聞きますが、大石隊長はとても紳士的な方でした。農地や建物の接収で泣いた人もいますが、竹富では島民が兵隊さんの暴力被害に遭ったことはありません。

不時着して流れ着いた敵兵を助け、石垣の基地に送還した「カメロン事件」は、人情に

厚い大石隊長の人柄を表す話として島民の語り草になりました。

終戦後、大石隊は復員まで3カ月ほど島内で過ごしました。兵隊島民に届けて食べ物を分けもらったり、島民も石積み塀の上にイモ団子をそっと載せておいたりして助けました。島を去る時、大石隊長は「さらば、竹富よ」と歌い、島民も帽子を振って別れを惜しみました。

大石隊の子や孫の世代と島民の交流は、現在も続いています。おそれ、竹富には他に例のない日本軍と住民の姿があったと思えます。

あの戦争では、集団自決の強要や略奪行為で日本軍が市民を苦しめたと聞きますが、大石隊長はとても紳士的な方でした。農地や建物の接収で泣いた人もいますが、竹富では島民が兵隊さんの暴力被害に遭ったことはありません。

不時着して流れ着いた敵兵を助け、石垣の基地に送還した「カメロン事件」は、人情に